石川県七尾美術館だより

平成20年１月１日発行
編集・発行　石川県七尾美術館

第52号(冬号)

②

①

ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM

「女流画家たちの視点」より

①「見透せぬ窓」前田さなみ
平成２年制作　第58回独立展

「桃山･江戸時代の長谷川派を中心に」より

②「達磨図」長谷川等言（等権）
江戸時代初期制作　石川・妙慶寺蔵

展覧会紹介

平成20年1月5日(土)～3月30日(日)
休館日については裏表紙をご覧ください

「女流画家たちの視点」
「桃山・江戸時代の長谷川派を中心に」

開催中～1月27日（日）

◇第一展示室

当館では、毎年石川ゆかりの作家や作品を紹介しています。今回は、女流作家たちがそれぞれの視点で捉えて描いた絵画を、所蔵作品と寄託作品から紹介します。

ノスタルジックな時の流れを感じさせるもの、時にはやさしく繊細で、時には内に秘めた強さが伝わってくるもの…日常の中で作家自身が感じた色々な思いが描き出されたものなど、彼女たちの視点や表現も様々です。

そんな魅力的な作品計十五点をお楽しみください。

《出品作家》

【日本画】

古澤　洋子
府玻　綾子
加戸ひとみ

【洋　画】

土田佳代子
小原　瑛子
佐々波啓子
野中未知子
前田さなみ
笹川　順子

「街の隙間」府玻綾子

「屋根」古澤洋子

◇第二展示室

能登国七尾出身の長谷川等伯（一五三九～一六一〇）は、二十歳代にはすでに信春の名で多くの仏画や肖像画を描き、三十歳を過ぎて上洛、高僧や当時最高の文化人たちと親交を結び、五十歳代には長谷川一派の長となり、画壇の実力者であった狩野派に対抗して活躍しました。

当館では、等伯出身地にある美術館として平成八年度から毎年テーマを変えて「長谷川等伯シリーズ展」を開催、十三年度からは広く長谷川派の作品も紹介してきました。

本展は、平成二十年春の特別展「長谷川等伯展～久蔵の国宝【桜図】特別公開～」を前に、当館所蔵、寄託作品を中心に桃山・江戸時代に活躍した長谷川派と呼ばれる画家たちの作品を紹介する小規模展です。

等伯亡き後、京都を中心に活動した長谷川派の画家（絵師）たちもいれば、等伯の郷里周辺で活動した画家（絵師）たちも存在しました。時が経つにつれ、彼らは等伯の画風だけではなく様々な画派の影響を受けながら制作していきました。その一端をご覧いただければと思います。

《出品作品》（□＝県文、△＝市町村文）

① **「山　水　図」** 一幅　長谷川等叔（信春・賀一郎）　江戸時代後期　富山県・笹林家

② **「不動明王八大童子像」** 一幅　長谷川等鶴（信房・賀一）　江戸時代後期　石川県七尾美術館

③ **「蝦蟇仙人図」** 一幅　長谷川雪嶺　江戸時代後期　石川県・個人

④ **「達　磨　図」** 一幅　長谷川等言（等権）　江戸時代初期　石川県・妙慶寺

⑤ **「波龍図屏風」** 六曲一双　長谷川左近（等重）　江戸時代初期　和歌山県・金剛三昧院

⑥△ **「涅　槃　図」** 一幅　長谷川等誉　桃山時代後期～江戸時代初期　石川県・山田寺

⑦□ **「善女龍王図」** 一幅　長谷川信春（等伯）　室町時代末期　石川県七尾美術館

⑧□ **「達　磨　図」** 一幅　長谷川信春（等伯）　室町時代末期～桃山時代初期　石川県・龍門寺

⑨△ **「十六羅漢図」** 二面　長谷川派　室町時代末期　石川県・悦叟寺

「不動明王八大童子像」長谷川等鶴

等伯と交流のあった沢庵和尚の賛がある「西湖図屏風」や、「三十六歌仙扁額」などを描いた、等伯四男とされる**長谷川左近**（等重）、江戸初期に活動し、徳川家康の知遇を得た天海僧正の賛をもつ「涅槃図」を描いた**長谷川等言**（等権）、能

登を中心に「涅槃図」などの仏画や金地の屏風を描いて活躍した**長谷川等誉**、左近に学んだといわれる**長谷川雪嶺**、越中国（富山）東岩瀬出身で、狩野派の石田友汀門人ながら長谷川家の養子となり、等伯三男・宗也系の雪舟から十二代を名乗った長谷川等叔と、同じく雪舟から十一代を名乗り“仏画名人”と伝えられる**長谷川等鶴**などの作品七点と、等伯の信春時代作品二点の計九点を紹介します。

また、ハイビジョンコーナーでは、映像で等伯作品をご覧いただけます。

「達磨図」長谷川信春（等伯）　龍門寺蔵

★平成二十年は、七尾生まれの等伯長男・久蔵の生誕四四〇年です。

★平成二十二年は、等伯没後四〇〇年です。

〈共通観覧料〉

	個人	団体
一般	350円	280円
大高生	280円	220円

※中学生以下無料、団体は20名以上です。

「春の所蔵品展」

2月9日(土)～3月30日(日)

◇第一展示室

―織部づくし―

当館所蔵品の中核をなす池田コレクションは、七尾市出身で七尾市名誉市民故池田文夫氏が蒐集した美術品です。このコレクションには池田氏が経済人として活躍された美濃地方のやきものが多く含まれています。今回はそのやきもの中でも、多くを占める織部焼を一堂に展観します。

桃山時代、優れた茶匠の登場により茶の湯が栄え、あわせて茶陶の生産が盛んになりました。それまでの唐物から、静謐な黄瀬戸、独創的な志野、織部に代表される桃山陶器への需要が高まっていきます。黄瀬戸により美濃の桃山茶陶は始まり、志野で鉄絵文様が、加えて織部では鮮やかな緑釉、自由奔放な形、大胆な意匠が発展しました。

今回は黄瀬戸・志野の作品とともに織部焼の誕生までを紹介し、桃山から江戸時代に制作された、志野織部、黒織部、青織部、鳴海織部、絵織部、赤織部、弥七田織部、伊賀織部（美濃伊賀）の優品約三十点をご覧いただきます。また、煙管やふりだし、鬢盥（びんかん）や小皿など、貴重な発掘資料である陶片も公開します。

「織部人物置物」
桃山～江戸時代

◇第二展示室

―石川ゆかりの作家たち―

当館は開館以来、石川県ゆかりの作品を収集してきました。

石川の地に生まれ育った作家の作品には、石川の自然やそこに住む人々を映し出したものや、記憶の中に残る故郷を連想させるものなどが多くあります。石川を離れる作家もいれば、制作の地として選び活動する作家もいます。

本テーマでは所蔵品及び寄託品より、石川県にゆかりのある作家の絵画作品と彫刻作品を展示、紹介します。

「織部蓮絵茶碗」
桃山時代

「織部草花文角鉢」
桃山時代

「望」得能節朗

◇観覧料

	個人	団体
一般	350円	280円
大高生	280円	220円

※中学生以下無料、団体は20名以上です。

アートホール催し物案内

フルートとハープ　コンサート

2月24日（日）　開演　午後1時30分

金沢よりハープ奏者・上田智子さんをお招きして、フルート・松本佐智子でみなさまにお届けします。春を待つひととき、フルートとハープの調べをお楽しみください。

入場料　1，000円
主　催　音楽企画ピア
連絡先　松本　☎090-3885-0061

七尾子ども劇場　第156回例会　マリンバカンパニー　mini

3月23日（日）　開演　午後1時30分

聴くだけじゃない?!観るコンサート！「な～んだ木琴か～」「でも本当はすごいんだよ！」パフォーマンスと超絶テクニックで、マリンバの魅力をたっぷりとお楽しみ下さい。

入場料　無料（会員制　※入会が必要となります）
入会金　一家族　1，000円
　　月会費　一人　1，200円
主催・連絡先　七尾子ども劇場
　☎0767-52-0821
　（火・木　10:00～15:00）

—*—*—*—*—*—

特別展「茶の湯の美術
～石川県立美術館所蔵の名品を中心に～」

「茶の湯の美術講座」報告

当館で平成十九年九月二十二日～十月二十八日に開催しました、特別展「茶の湯の美術」の関連行事として十月七日、十四日の両日にわたり「茶の湯の美術講座」が開かれました。

講師は当館及び石川県立美術館の嶋崎丞館長で、奈良時代以降現代に至るまでの「茶」の歴史について、前後期に分けた形での講演でした。

前期（十月七日）は茶の伝来から室町時代末期までの、いわゆる「茶の湯」成立前史についてで、奈良時代の日本における茶の始まりから、鎌倉時代の「禅宗儀礼」としての「寺院の茶」の広まり、室町時代のバサラ大名たちに流行した「闘茶」、「東山文化」の担い手・室町幕府同朋衆の活躍、そして堺町衆の茶と村田珠光・武野紹鷗の登場までについて触れ、「茶の湯」成立の背景には、それら京都の幕府と寺院、周辺地域の有力大名、そして地方の裕福な経済人の、各々の活動が結びついたものである、との話でした。

その中には日本での喫茶の初期のスタイルとされている、京都建仁寺で開催されるお茶の儀礼に参加した時の、現在とは異なる珍しい飲茶の経験談もあり、聴講者は興味深く聞いていらっしゃいました。

そして後期（十月十四日）はいよいよ「茶の湯」を大成した千利休が登場、安土桃山時代から現代までの流れの話となりました。

桃山時代の「茶の湯」は、禅の厳格な精神を背景とした日本独特の美意識「わび」による伝統と格式を重んじた「茶の湯」を行った千利休と、国産や南蛮の道具を積極的に採用して、新しい創造による斬新な「茶の湯」を行った古田織部を軸に展開し、この時期はいわば利休の「伝統」と織部の「斬新」の二つの流れがぶつかった「茶の湯の天下分け目」ではなかったか、とのことでした。

嶋崎館長による「友の会特別鑑賞会」も開催（9/30）

そして江戸時代には「茶の湯」に「平安王朝的な美」を加えた小堀遠州や、繊細で雅な感覚による美の創造「きれいさび」を行った金森宗和、そして千家を復興し利休の「わび」の精神を更に追求した千宗旦などが、大きな足跡を残したことを順に解説しました。

また、茶道具が整理分類されて名物の格付けがなされた結果、「名物」道具が貴重視され「数寄大名」などによる名物蒐集が流行、その流れは近代以降も「数寄者」と呼ばれる新興財閥たちによって継承され、それが現在の茶道美術館の基礎となったとして講座を締めくくりました。

話は展覧会出品作品を含む様々な名品を紹介しながらの分かりやすい内容で、聴講された方々の頷く姿がよく見られました。二回とも講座に参加された方も多く「色々なエピソードを交えての話でとても良かった」、「整然とした内容で茶の湯の歴史が良く分かった」などのお声を頂きました。

第8回　石川県七尾美術館
友の会鑑賞の旅を終えて

まだ夜も明けきらぬ午前五時三十分、『友の会鑑賞の旅』参加者二十六名を乗せたバスは、紅葉にはまだ少し早い京都へ向け出発しました。石川県内走行中は小雨まじりでしたが、目的地に近づくにつれ、良いお天気になってきました。

京都国立博物館前にて

まずは、京都国立博物館で開催中「狩野永徳」展の鑑賞です。さすが今秋話題の展覧会とあって入り口にはすでに入場待ちの行列ができていましたが、幸い会期が始まって間もない頃だったためか約十五分後に入場することができました。展示室内は大変込み合っていましたが、音声ガイドを利用して効率よく鑑賞する方、お気に入りの作品とじっくり対峙している方など参加者の皆様は様々なスタイルで素晴らしい作品を楽しんでおられるようでした。

昼食後は、京都の風物詩である東寺（教王護国寺）の「弘法市」（骨董市）へと向かいます。こちらもやはり大変な人出で付近の道路までも渋滞していました。門から百メートルほどの宝物館への道のりも人ごみの中を歩くと倍以上に遠く感じます。参加者の方々を見失わないように、そして自分もはぐれないよう必死で歩きました。

宝物館では同館の新見学芸員が東寺の沿革や現在展示中の作品について丁寧に解説してくださいました。その後は約一時間三十分「市」の自由散策タイムです。お疲れ気味ななかにもどこか満足気な表情で「掘り出し物」を手にして集合場所まで戻って来ていた方もいらっしゃいました。

帰りには「市」開催の前後三日間しか製造しないという名物の「どら焼き」を販売する和菓子屋さんへ立ち寄りました（これが結構、好評でした）。夕暮れせまる京の町並みに名残惜しさを感じながら七尾への帰路につきました。

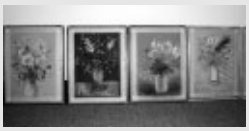
参加者皆様のご協力のもと「京の秋を満喫」する楽しい旅となりました。どうもありがとうございました。

友の会美術講座
◆「パステル画入門」開催報告◆

去る十月二十七日、友の会美術講座として志賀町在住のパステル画家である榎本友康氏を講師に迎え「パステル画」を描く講座を開催しました。会員様へハガキでご案内・参加者の募集をしたところ、応募が多数あり、数日間で定員数（十名）に達しました。

デッサンまたは絵画を描いた経験のある方が半数、その中で「パステルを少々」と言う方が二名、参加者のほとんどが初心者の方でした。

はじめに、榎本先生が「パステル」の種類と原材料についてレクチャーし、先生お手製の彩色見本帳も見せていただきました。そしていよいよ実践編。「何よりもまずパステルで描く楽しさを感じてもらいたい」という先生の意向で、花瓶に活けられた花をさっそく描き始めます。時折、先生に指導を受けながら、約二時間程で各々すてきなパステル画を仕上げていました。講師の先生、参加者の皆様どうもありがとうございました。



平成20年度
石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集します。現在会員の方で更新をご希望される方は改めてお申込み下さい。お申込みのない場合はそのまま退会となってしまいますのでご注意下さい。

★入会手続き★

① 受付開始　3月1日(土)から
【年度会費　1、000円】

② 受付場所　当館受付カウンター
または郵便受付
（郵便振替用紙をご利用ください）

※郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項《会員の区別（更新・新規・元会員）・郵便番号・住所・電話番号・氏名・生年月日》をご記入のうえ、会費を添えてもよりの郵便局窓口へお出し下さい。払込料金120円は申込者負担となります。

郵便振替口座　00710−0−50795
加入者名　石川県七尾美術館　友の会

★友の会に入会するとこんな特典があります★

その1　当館主催展覧会の観覧料が割引になります。

その2　情報満載「美術館だより」（年度内4回発行）が郵送されます。

その3　相互割引提携館主催の展覧会観覧料が割引になります。（会員本人のみ）
※相互割引提携館（石川県立美術館・石川県立歴史博物館・石川県能登島ガラス美術館・石川県輪島漆芸美術館・珠洲市立珠洲焼資料館）

その4　特別企画展開会式・内覧会へご招待。（無料）

その5　販売グッズが割引になります。（一部除く）

このほかにも友の会会員限定の催し、特典がありますのでぜひ更新、ご入会ください♪

等伯コーナー

長谷川等伯展　～最晩年の名作～
特別講演会報告

「最晩年の長谷川等伯」

講師　宮島 新一 氏（山形大学教授）

昨日までこちらでは「青柏祭」というお祭りをやっていましたね。実は私はお祭りが大好きで、夕べは夜中近くまでずっと見ておりました。能登では三月に大きな地震があり大変心配しましたが、こちらに来て皆さんが地震に負けずに元気に祭りをやり遂げられている姿を見て、復興への大変強い力を感じてとても安心いたしました。

今日は長谷川等伯の最晩年についてお話をしたいと思います。私は学生時代を京都で過ごしたので、お寺などで等伯の作品を観る機会がよくありました。それで等伯とは素晴らしい画家だと、いつかは等伯の研究をしたいものだな、と思っていました。

等伯「再評価」の功労者

今でこそ長谷川等伯と言えば日本を代表する画家として大変有名ですが、むしろ等伯が再評価されたというのは昭和時代になってからなんですね。一時期等伯の名前がすっかり埋もれた時期がありまして、それは奇妙なことに明治時代以降のことで、等伯は明治・大正時代には殆ど重要視されていませんでした。一例を挙げると「楓図」（京都市智積院蔵・国宝）は、江戸時代は等伯筆だったのが明治時代に狩野永徳筆となり、土田杏村の主張などを経て昭和初期にようやく等伯筆に戻ったという具合です。

その等伯が現在のように再評価されたのには、二人の研究者の大きな功績がありました。まずは土居次義先生で、それまで別人とされていた長谷川信春と長谷川等伯が同一人物であるという「信春等伯同人説」を提唱されたことで著名な方です。それからもうお一人、等伯の最晩年を語る上で欠かせないのが山根有三先生で、「等伯研究序説」を発表して「信春等伯同人説」に異議を唱え、更に等伯の晩年作品に多く見られる「法眼落款」のある作品を等伯筆とは認めないと主張されました。

お二人は戦後の一時期、京都博物館（現・京都国立博物館）に勤務していたことがあり、土居先生は館長として、山根先生はその部下として一時期とても近いところで研究を進められていたこともあったのですが、学問上では対立する関係だったと言えます。

私は京都で勤務先の関係から、土居先生から直接指導を受けたことがございました。また山根先生については、文化庁に勤務していた頃に文化財保護審議委員であった先生と仕事でお会いする機会があり、よくご指導を頂きました。ですから私にとって、土居先生も山根先生も恩恵を与えてくださった重要な方だと思っています。

「法眼落款」論について

山根先生より直接お聞きしたのですが、先生は「等伯研究序説」発表後等伯研究を封印されていたのですが、土居先生が亡くなられた後にお墓にお参りされて、等伯研究の再開を誓われたそうです。実際にその後、山根先生は非常に旺盛な等伯研究を再開されておりますが、その根本は「法眼落款」作品を否定することにありました。

「法眼落款」否定の根拠ですが、第一に朝廷より与えられる官位の問題で、等伯は法橋叙任の翌年に法眼になったといわれますが、僅か一年で法橋から法眼になった人はいないということ、第二に等伯の基準作とされる作品と、「法眼落款」作品の印章が違うということを挙げておられます。しかし法橋の翌年法眼になった人はいないというのは、あくまでも知られている史料の上であって全くその可能性がないとも言えません。また印章の違いについても土居先生の主張のように晩年に印章を変えたという考え方もあり、この二点の論拠については私は疑問に思います。

しかし次の第三点については、私はとても重要であり山根先生の鋭い鑑識眼の表れだと思うのですが、これまで等伯作として図版などにもよく登場する有名な晩年作品の何点かを、作風などより判断して等伯筆ではないと初めて主張されたことです。現実に「法眼落款」作品に疑わしい作品が多いことは事実で、私自身もこれは等伯とは認められないと思う作品は何点か思い当たります。

但し、山根先生は論点を更にもう一歩先へ進められて、「法眼落款」作品は全て次世代、次々世代位に位置する子孫が描いたものだと主張されたんですね。例えば娘婿の等秀や等憶などの作品であるとし、全ての作品にそれらの画家を作者として当てはめていったのです。しかし等秀や等憶にしても基準となる作品はまだ見つからず、まだ系図上のみの存在なのですね。ですからあくまでも推論であるはずですが、先生は断定的に論じられており、そこには誰の作なのかをはっきりさせないといけないという強い信念を感じさせます。

確かに美術を研究する者にとって作品の真贋や作者を決定することはとても快感で、ややもすれば皆その傾向があります。しかし、この「作家を

決めなければ気が済まない」という願望は一種の「美術史家の病」とも言えるものであり、よほど明白な証拠が提出できない限りはあまり作家を断定しない方が良いと思います。

この様に山根先生の「法眼落款」論については賛同できないところもありますが、実は先生は等伯研究の中でとても重要なことを述べられています。それは等伯を巡る「人間関係」について詳しく論じられていることであり、土居先生が等伯の多くの作品を世に紹介するなどの功績を残されたのに対し、山根先生はその土居先生があまり触れていなかった部分を解明されたのです。

このことが「法眼落款」論の陰に隠れてしまっている状況を私はとても残念に思っており、いつかお二人の大先輩の功績を組み合わせたい、とずっと思っておりました。そこに山根先生が亡くなられた二年後に、長谷川等伯の評伝を書かないかという提案がございまして、私はとても奇縁を感じると共に、嬉しく思いました。本は平成十五年に出版されましたが、この中で等伯を取り巻く人間関係について山根先生の書かれたことを元に、更に敷衍して等伯がどんな人々と交際していったかということを明らかにできたのではないかな、と思っております。

等伯が「自雪舟五代」に込めた思い

土居先生が発掘された等伯関係史料を先鞭として、その後も新しい作品や史料が次々と発見されております。その中で特に耳新しいのは「涅槃図」（七尾市長壽寺蔵）のこれまで読めなかった印章の文字を、平成十七年に東京国立博物館の松原茂さんが「無分」と読まれまして、この作品が等伯の祖父「無文」の用いた印章ではないか、ということを明らかにされたことですね。

これは等伯研究上非常に重要な発見で、等伯がなぜ「自雪舟五代」と名乗ったかということのカギを握っているのですね。「自雪舟五代」というのは、「①雪舟→②等春（雪舟の弟子）→③無文→④道浄（等伯養父）→⑤等伯」ですが、その中で謎の存在であった無文が絵を描いていたという可能性が生じ、それによって確かに等伯が「自雪舟五代」と名乗る理由があったということが分かったわけですね。

ところで、この「自雪舟五代」についてですが、等伯が自分の画論を述べた『等伯画説』（京都市本法寺蔵・重文）の中では、等春の事績について幾つも書いているのですが、雪舟については殆ど記載がありません。その代わり等伯は黙庵という画家をとても高く評価しています。黙庵は現在では日本人だと判明しているのですが、当時は一般的に中国の画家だと考えられていました。ところが等伯は黙庵を、日本人であり水墨画家として等伯も尊敬していた牧谿より上手であると言い切っています。私はこの部分がとても不思議であり、印象深く思われます。

ですから本来であれば等伯が褒め称えるべきは牧谿や黙庵、等春になると思うのですが、それにも拘らず雪舟を出したのは、現在の日本において最も水墨画が上手いのは自分だと言いたかったのではと思うのですね。つまり等伯の時代、既に雪舟は水墨画の世界での第一人者であり、加えて実際に等春が雪舟の弟子であったことなどから、雪舟を引き合いに出して、水墨画では自分が「天下一」であることを宣言したのかも知れません。

それと当時は大和絵などの日本的な絵画よりも、中国が本家の水墨画がいわゆる高度な絵画、つまり「芸術」であるという意識があったのではないか、そして等伯は絵屋の「職業画家」ではなく「芸術家」になりたいのだと、それには水墨画を描くことだということで、「自雪舟五代」を名乗るようになったのではないかと私は推測しております。

最晩年の長谷川等伯

しかし人は「老い」によって精神的・肉体的に衰えるのは宿命でそれは等伯も同様であり、思いに体がついてこないことが多かったと思います。それが表れていると私が考えている作品が「烏梟図屏風」（大阪市立美術館蔵）で、これは「自雪舟五代長谷川法眼等伯六十九歳」の落款があるいわゆる「法眼落款」作品の一点です。枯れ枝に止まるフクロウと二羽のカラスが描かれていますが、これは昼間目が見えないフクロウをカラスがからかっている場面に見えます。私はこの作品に、六十九歳の齢となり目が十分に見えず絵が描けない自分自身を皮肉っている、等伯晩年の心境が表われているのではないかな、と思います。やや自嘲気味ですが、逆に言えばそれだけ自分を客観視できるだけの力もあったとも言え、そう見ますとこの作品も味のある内容であり、等伯筆と十分認めて良いのではないかな、と考えております。

等伯は最晩年、慶長十五年（一六一〇）の亡くなる直前になりますが、江戸に向かっております。この頃の交通手段は徒歩でしたので、七十二歳という老齢で京都から江戸に向かうという決意をするのは並大抵のことではなかったと思います。当時の江戸は幕府が開かれて間がありませんから大変な建築ブームで、寺院もたくさん作られて多くの画家が必要でした。しかも狩野派は当主・光信が若年で急死し跡継ぎも幼かったことから中枢が空白の状態だったのです。ですから等伯はそういう時こそ私が出るチャンスだと、京都では天下人秀吉の仕事をしましたので、江戸でも再びと思ったのでしょうね。

しかし江戸到着後の僅か二日後、二月二十四日に寿命が尽きてしまったのはとても残念なことだったと思います。

※本文は平成十九年五月六日に行われた特別講演会の内容を当館の責任においてまとめたものです。

平成20年度 春の特別展予定

平成20年４月５日（土）～５月６日（火・振休）　会期中無休

（仮）長男・久蔵生誕440年記念

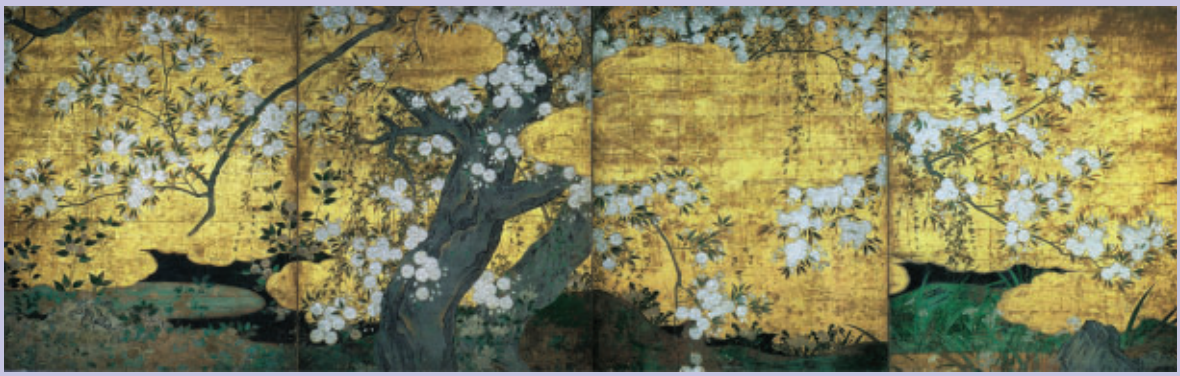
「長谷川等伯展～久蔵の国宝【桜図】特別公開～」

当館では、桃山時代に京都で活躍した長谷川等伯の郷里にある美術館として、平成８年度より毎年「長谷川等伯シリーズ展」を開催し、広く弟子たちの作品も紹介してきました。

さて、その弟子たちの中にあって後継者として実力を高く評価されながらも、26歳という若さでこの世を去ったのが、七尾生まれの長男・久蔵です。平成20年は、その久蔵の生誕440年にあたります。

そこで、この記念の年に久蔵の代表作で高い人気を誇る国宝【桜図】を特別公開、等伯は元より、宗宅、宗也、左近など、息子たちの作品が七尾に集います。

今回の展示11点中、７点が七尾初公開となります。是非お見逃しなく！



国宝「桜図壁貼付」４面　長谷川久蔵　京都・智積院蔵

平成20年度　市民ギャラリー＆アートホールの利用申込みについて

七尾美術館では個展、グループ展、演奏会など、幅広い芸術活動の発表の場として市民ギャラリーとアートホールの貸室を行っています。平成20年4月からのご利用については、1月5日(土)～２７日（日）を第1次募集期間として受付けします。展覧会等の関係上、ご利用いただけない期間もありますので、詳しくは七尾美術館までお問い合わせください。

【利用可能期間は当館ホームページでも確認できます】

プレミアム・パスポート　PREMIUM PASS　子育てにやさしい店

割引、プレゼントなど特典いろいろ！
ぜひ当館でもご利用ください。

飛行機……能登空港から能登有料道路利用約45分
車……金沢から能登有料道路利用約１時間15分
タクシー…JR七尾駅から約５分
徒歩……JR七尾駅より約20分
市内循環バス…JR七尾駅前５番乗り場から西回りに乗車約６分（まりん号）

休館日のお知らせ

（１月～３月）

◆１月　１～4,7,15,21,28～31
◆２月　１～8,12,18,25
◆３月　3,10,17,21,24,31

◎次号・第53号（春号）は４月１日発行予定です。

〒926-0855　石川県七尾市小丸山台1丁目1番地
TEL(0767)53-1500／FAX(0767)53-6262
http://www.city.nanao.lg.jp/nanabi/